

かつ お きょう づか  
勝 雄 経 塚

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXV—

1997年3月

兵庫県教育委員会



経筒 (処理後)



外容器と経筒（処理前）



外容器と経筒（処理後）・経巻（修復後）

## 例 言

1. 本書は、山陽自動車道三木ジャンクション建設に伴い発掘調査を実施した、神戸市北区<sup>たか</sup>淡河町勝雄字奥谷に所在する勝雄経塚（かつおきょうづか）の発掘調査報告書である。
2. 調査は当初、神戸市道跡地図に基づき勝雄城跡として調査を実施したが、調査の結果城跡が確認できず、経塚を発見したので、勝雄経塚として報告する。
3. 調査は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
4. 本書に使用した座標及び水準の基準は、道路公団の設置した国土地標及び東京湾平均海水準を使用している。
5. 本書の執筆分担は本文目次に示したとおりである。
6. 本書の編集は、山下史朗・松岡千寿が行い、八木和子と岸野奈津子の協力を得た。
7. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
8. 本書の作成に際して、経巻の修復作業については京都国立博物館と文化財保存修復所株式会社岡墨光堂に、経巻の繊維分析については高知県立紙産業技術センターの大川昭典氏に、経巻の保存処理作業については奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に、出土遺物の写真撮影については奈良国立文化財研究所の佃幹雄氏にそれぞれご協力を得た。その他、以下の方々に有益な御教示・御助力を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

赤尾栄慶 綾村 宏 伊藤 晃 岡本孝道 北川 央 久保智康 小嶋博巳 小林基伸  
杉本和樹 杉山 洋 関 秀夫 館野和己 田中智彦 難波洋三 藤井利章 間壁霞子  
真野 修 宮川植一

## 本文目次

第1章	調査に至る経緯と経過 .....	( 山下史朗 )	1
第2章	遺跡をとりまく環境		
第1節	地理的環境 .....	( 山下 )	3
第2節	歴史的環境 .....	( 山下 )	4
第3章	遺構		
第1節	調査の概要 .....	( 山下 )	7
第2節	経塚 .....	( 山下 )	9
第4章	出土遺物		
第1節	経塚の遺物 .....	( 松岡千寿 )	11
第2節	その他の遺物 .....	( 山下 )	18
第5章	保存処理 .....	( 松岡 )	21
第6章	勝雄経塚経巻の繊維について .....	( 大川昭典 )	25
第7章	まとめ .....	( 松岡 )	29

## 挿 図 目 次

第1図	勝雄経塚の位置	1
第2図	現在の県道三木三田線	3
第3図	周辺の遺跡	5
第4図	トレンチ配置図	7
第5図	No.3 地点調査風景	8
第6図	経塚地形測量図・断面図	9
第7図	経塚の埋納坑	10
第8図	経筒の収納状態	10
第9図	経筒銘文	11
第10図	外容器と木製蓋	12
第11図	経筒	13
第12図	蓋の拡大写真	14
第13図	経巻の収納状態	15
第14図	土製容器片	18
第15図	No.3 地点出土の土器	18
第16図	No.3 地点出土の鉄器	19
第17図	経巻の修復過程	22
第18図	経筒の保存処理作業	24
第19図	経巻の顕微鏡写真	27
第20図	兵庫県下の経塚	32

図版3	外容器と木製蓋、経筒の収納状態
図版4	経筒（処理前）、経巻の収納状態、 経筒のX線写真
図版5	経筒銘文拡大写真（倍率；任意）
図版6	経巻（1）法華経第一巻
図版7	経巻（2）法華経第一巻
図版8	経巻（3）法華経第一巻
図版9	経巻（4）法華経第一巻
図版10	経巻（5）法華経第二巻
図版11	経巻（6）法華経第二巻
図版12	経巻（7）法華経第二巻
図版13	経巻（8）法華経第二巻
図版14	経巻（9）法華経第二巻、第三巻
図版15	経巻（10）法華経第三巻
図版16	経巻（11）法華経第三巻
図版17	経巻（12）法華経第三巻
図版18	経巻（13）法華経第三巻、第四巻
図版19	経巻（14）法華経第四巻
図版20	経巻（15）法華経第四巻
図版21	経巻（16）法華経第四巻
図版22	経巻（17）法華経第四巻、第五巻
図版23	経巻（18）法華経第五巻
図版24	経巻（19）法華経第五巻
図版25	経巻（20）法華経第五巻
図版26	経巻（21）法華経第五巻、第六巻
図版27	経巻（22）法華経第六巻
図版28	経巻（23）法華経第六巻
図版29	経巻（24）法華経第六巻
図版30	経巻（25）法華経第六巻、第七巻
図版31	経巻（26）法華経第七巻
図版32	経巻（27）法華経第七巻
図版33	経巻（28）法華経第七巻
図版34	経巻（29）法華経第八巻
図版35	経巻（30）法華経第八巻
図版36	経巻（31）法華経第八巻
図版37	経巻（32）法華経第八巻、経軸（こ より）、残欠、経巻の修復保存状態
図版38	経巻（33）法華経全八巻

## 写 真 図 版 目 次

巻頭図版1	経筒（処理後）
2	外容器と経筒（処理前） 外容器と経筒（処理後）・経巻（修 復後）
図版1	調査地遠景（北東から） 調査地遠景（南西から） 調査地からみた淡河方面
図版2	11トレンチと埋納坑（北から） 経筒出土状況（北から） 経筒出土状況（真上から）

図版39 土製容器片

図版40 №3 地点出土の土器

№3 地点出土の鉄器

## 表 目 次

第1表	周辺の主要遺跡一覧	4
第2表	各経巻主要文字抽出表	16
第3表	経巻計測表	17
第4表	勝雄経塚埋納経の密度	26
第5表	現代の手漉き紙の密度	26
第6表	古い時代の写経料紙の密度	26
第7表	兵庫県内の六十六部奉納の経塚	29
第8表	兵庫県経塚地名表	33

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経過

日本道路公団は、平成10年の本州四国連絡橋神戸鳴門ルート完成に合わせて、山陽自動車道、明石海峡大橋とこれを結ぶ西神自動車道の建設を計画した。兵庫県教育委員会では、この工事に先立って道路建設予定地内の分布調査を実施して、遺跡の有無を確認した。この分布調査では、4箇所の地点で遺跡を発見した。この結果を受けて、日本道路公団の依頼により、県教育委員会が確認調査を実施することになった。

4カ所の地点には、それぞれ西神自動車道№1～4地点と仮の名称を与えたが、この内で特に№2・3・4地点は勝雄城跡として神戸市埋蔵文化財分布地図に記載されている周知の遺跡である。したがって不明な点の多い勝雄城跡の構造、年代、範囲などを知ることを目的として確認調査を行った。

#### 確認調査

確認調査は、平成7年2月13日～3月8日と、同年4月10日～17日の2次にわたって実施した。

調査の主眼は勝雄城跡の遺構検出にあるため、特に城の曲輪と考えられる尾根上の平坦地を中心に19カ所のトレンチを設定して遺構、遺物の検出を図った。



第1図 勝雄経塚の位置

調査の結果、城郭に関しては明瞭な遺構は認められなかったものの、№3地点の3トレンチで平安時代末期の鉄製U字形耕起具が出土したほか、№4地点に設けた11トレンチで室町時代の経塚を発見した。

なお、全面調査については、経塚の性格上、この確認調査ですでに完掘していると考えられるため行っていない。

#### 整理作業

出土した経筒は直ちに事務所に持ちかえり、応急的な保存処置を施した。

翌平成7年度には日本道路公団と2年計画の出土品整理契約を結び、出土品の整理と保存処置、報告書発行を行った。



なお、出土品整理には、山下、松岡と嘱託員の八木和子、岸野（西海）奈津子とがあたり、経巻の修復には（株）岡墨光堂、経筒の保存処理には奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏の協力を得て、加古千恵子がこれにあたった。

出土遺物の写真は一部を除いて、奈良国立文化財研究所佃幹雄氏に撮影して頂いた。

#### 【発掘調査体制】

調査主体：兵庫県教育委員会

平成7年度 確認調査（940310）

平成7年2月13日～平成7年3月8日（18日間）

調査第3班	主 査	山下 史朗
	技術職員	松岡 千寿

平成8年度 確認調査（950002）

平成7年4月10日～平成7年4月17日（7日間）

調査第2班	技術職員	松岡 千寿
	技術職員	高木 芳史

#### 【整理作業体制】

平成7年度整理作業

	調査第1班	主 査	山下 史朗
	調査第2班	技術職員	松岡 千寿
保存処理担当職員	整理普及班	主 査	加古 千恵子
整理技術嘱託員		図化技術員	上山 雅代

平成8年度整理作業

	調査第1班	主 査	山下 史朗
	調査第2班	技術職員	松岡 千寿
整理担当職員	整理普及班	主 任	甲斐 昭光
整理技術嘱託員		主任技術員	八木 和子
		図化技術員	岸野（西海） 奈津子
保存処理担当職員	整理普及班	主 査	加古 千恵子
	調査第2班	技術職員	松岡 千寿

## 第2章 遺跡を取り巻く環境

### 第1節 地理的環境

#### 位置

神戸市は、六甲山系と帝釈山、丹生山系という東西に連なる背骨を境に、大きく南北に分かれている。勝越経塚は、このような山系の北側、神戸市北区淡河町勝雄字奥谷と三木市志染町戸田字西谷との境界に位置する標高194mの山上にある。厳密にいうと、行政区画上はわずか3mばかり神戸市側に入った場所にある。

#### 地形

六甲山の北から西側一帯にかけては、2000～3000万年前に堆積した神戸層群が隆起してできた丘陵地帯が広がり、これを削り込んだ谷が東西方向に延びている。この谷あいには小盆地が形成されることが多いが、山地の隆起速度が高く谷の出口が狭い場合には峡谷が形成される。淡河川の場合もこの例に漏れず、東側の神戸市北区淡河町側と西側の三木市志染町との間には、およそ30mの落差が存在している。

三木市から神戸市西区にかけては、神戸層群の上におよそ200万年前に堆積したとされる大阪層群が厚く広がっている。これらの地層は、本来水平に堆積したものが、六甲山系の隆起に伴い丘陵化したものであるから、頂上部にたつと平坦な地形に見え、谷間のみが深く切れ込んだように見受けられる。事実、遺跡から周囲を見渡すと、帝釈山、丹生山系の他には越岡山、雌岡山の円錐形が目につくだけである。このような中において、経塚の発見された丘陵は、東西両側が谷によって削られた急峻な尾根の頂にあって、下層が神戸層群からなり、その上に大阪層群が一部堆積しているようである。

#### 交通

この尾根を挟んで東が神戸市北区淡河町、西が三木市志染町と現在の行政区画に当たっている。現在は県道三木三田線が通り抜けているとおり、陸路としては古くから京摂から播磨地方へと抜ける交通の要衝であった。江戸時代には西国街道の迂回路として湯山街道が通り、淡河は宿場町としてさかえている。

ところがこの峠を越えるのはなかなか容易ではなかったようで、現在の山を切り開いた県道のルートができたのは最近の事である。それ以前には3地点と4地点との間の切り通しが大正時代ころの県道で、さらに古くは、北側の山を越えて、伽耶院のある谷が太閤道と呼ばれる街道であつたらしい。このルートの重要性は、皮肉なことに、阪神淡路大震災によって六甲南側の交通路が遮断された際に、主要な東西物資輸送路となったことで身をもって知ることになった。



第2図 現在の県道三木三田線

## 第2節 歴史的環境

## 旧石器

三木市から神戸市西区にかけては、先にもふれたように、大阪府群からなる広大な丘陵地帯が広がっている。この丘陵地帯は旧石器人たちにとって格好の活動場所であったようで、いたるところで石器が拾われている。ところが、神戸市北区淡河町では、地形的に浸食される地帯であるためか、旧石器の発見は今のところない。

## 縄文

縄文時代になると淡河川沿いの淡河中村遺跡で縄文時代中期の住居が見ついている他、中山大池池で縄文前期の土器が、淡河中山遺跡で石鏃2点が出土するなど、現状でも、確実に祖先の足跡をたどることができる。

## 弥生

弥生時代には淡河城下層遺跡で住居跡が見ついているほかには、奥遺跡などで少量の弥生土器片が出土しているものの、目立った遺跡は見つかっていない。

## 古墳

古墳時代にはわずかに先の淡河中村遺跡で後期の住居跡が見ついているものの遺跡は少ない。淡河地方では今のところ古墳が見つかっていないことも、これら古代遺跡の少なさを裏付ける事実であろう。丘陵地が主体となる淡河地区では、水田可耕地となる低地が決定的に不足していることがその理由であろう。

## 古代

奈良時代以降でもこの傾向は同様で、奥遺跡から奈良時代の土器が出土しているほか、淡河上中遺跡で平安時代の建物跡が見ついているくらいで、目立った出土品はない。

ところが、平安時代の後半になると、石峰寺や伽耶院などの山岳密教系の寺院が成立する他、殿丘、丘陵地を中心に当地域の開発が進んでくるようである。

第1表 周辺の主要遺跡一覧

遺 跡 名 (時代)	9. 歳田遺跡	18. 丹生山城 (中世)
1. 勝雄経塚 (室町)	10. 奥遺跡 (奈良～平安)	19. 六甲国際ゴルフ場内遺跡 (縄文)
2. 野尻遺跡 (中世)	11. 正神経塚	20. 三津田遺跡
3. 淡河八幡神社遺跡 (中世)	12. 萩原遺跡 (中世)	21. 三津田城 (戦国)
4. 淡河中村遺跡 (縄文・古墳)	13. 萩原城 (戦国)	22. 三津田1号墳 (古墳)
5. 宿池遺跡	14. 淡河城 (戦国)	23. 御坂遺跡 (弥生)
6. 天正寺城 (戦国)	15. 淡河城付城 (戦国)	24. 戸田遺跡
7. 天正庵寺	16. 淡河城付城 (戦国)	25. 長板遺跡 (中世～近世)
8. 北山経塚	17. 淡河城付城 (戦国)	26. 伽耶院 (中世～近世)



第3図 周辺の遺跡

中世

この淡河の地が初めて歴史の表舞台に立つのは中世になってからと言ってよいだろう。石峰寺や伽藍などの有力寺院が栄え、勝雄経塚の発見までに多くの経塚が見つかるなど信仰の地として注目できる。

また、播磨地方に属する淡河地域は、その例にもれず小領主層の争いが頻繁であった。こうした事情を背景に淡河氏の居城として萩原城、淡河城などの城館が築かれたようである。特に戦国期には有馬氏に攻められこれら諸城は落城し、後に旧に復したものの再び織田軍により攻められている。このとき周辺に天正寺山城などのいわゆる付城が築かれている。このように幾たびか攻められた背景には、淡河の地が湯山街道にあって交通の要衝を占めていることに要因があろう。淡河城の落城後は有馬氏が入城するものの、1615年の一国一城令によって廃城となり、淡河地方は再び歴史の表舞台から遠ざかることになる。

参考文献

『淡河萩原遺跡発掘調査報告書Ⅰ』	淡神文化財協会・萩原遺跡調査団	1992
『淡河萩原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	淡神文化財協会・萩原遺跡調査団	1992
『淡河中山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』	淡神文化財協会・淡河中山遺跡調査団	1993
『淡河中村遺跡』	淡神文化財協会・淡河中村遺跡調査団	1992
『御坂遺跡』	兵庫県教育委員会	1994
『異遺跡・宮ノ沢城跡・淡河上中遺跡』	兵庫県教育委員会	1996
『久留美・毛谷』	久留美・毛谷古窯址群埋蔵文化財調査会	1990
『神戸市埋蔵文化財分布地図』	神戸市教育委員会	1996

## 第3章 遺構

### 第1節 調査の概要

#### No.1地点

丹生山地の北西側斜面から北に延びる尾根上にある。北側の山体から派生してきた尾根上に小規模な古墳状の隆起と集石が数カ所認められた。トレンチ調査の結果、遺構、遺物は認められず、集石も表土の上に浮いた状態で積み重ねられており、土地境界を示したものと考えられる。

#### No.2地点（勝雄城跡）

梨本峠の南側、淡河川に面した独立丘陵にある。山頂には国土地理院3等三角点があり、眺望のよい場所である。四周は急峻な崖をなしているが、山頂部とその周辺にはわずかな平坦地が数カ所ある。これらの平坦地を中心に、遺構・遺物の確認を目的としたトレンチを6カ所設定した。調査の結果、平坦面には曲輪などの人工的に手を加えた痕跡は全く認められず、遺物も出土しなかった。

#### No.3地点（勝雄城跡）

現在の県道の切り通しである梨本峠と、北側にある古い県道の切り通しとの間にある。尾根上には4カ所のピークがあり、南側の2カ所は近接している。このピークの東側はかなり急斜面になっているが、西側には緩斜面がある。



第4図 トレンチ配置図

発掘調査は工事範囲に含まれるこの最も南側のピークと緩斜面を対象に、遺構・遺物の検出を目的としたトレンチを設定した（1～5トレンチ）。

調査の結果、1トレンチでは尾根の鞍部に切り通しがあることがわかった。3トレンチでは斜面の流土中から鉄製のU字形鏝もしくは鋤先が出土した。4・5トレンチでは50cmほどの流出土の下に、厚さ20～30cmの土壌層があり、平安末～鎌倉期の須恵器片が数片出土した。土壌は明らかに耕作により形成されたものと判断できる。

これらのことから、中世初期にこの尾根の西斜面が畑地として開墾され、そこへ至る道として切り通しが設けられたと考えられる。鋤もしくは鋤先はこの時期の落とし物である可能性が高いだろう。遺構は検出できなかったが、おそらく工事範囲外の東側の標高137.2mのピーク上の平坦面あたりに建物跡があるのだろう。

同様の中世初頭の山上での開墾の例は、同じく山陽自動車道建設により調査した淡河町宮ノ沢城跡でも見つかっており、この地域での丘陵上の開発の実体を示す資料として注目できよう。

なお、旧道切り通しの脇に平坦地があったので6トレンチを設定したが、遺構・遺物ともに検出できなかった。

#### №4地点（勝雄城跡）

東西両側が切り立った急斜面をなす幅の狭い尾根上にある。兵庫県埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、勝雄城跡は昭和46年に実施された分布調査で、尾根上に径25mの平坦面があり、東・西・南側に石垣らしいものが存在するとされている。そこで尾根上の平坦面に5カ所のトレンチを設定し遺構・遺物の発見につとめた。

調査の結果、城の曲輪と判断できる遺構は確認できなかった。また、石垣と考えられたものも、地山に層状に含まれている岩盤層が、あたかも石垣様に見えたものだとわかった。

ところが、城とされた山頂平坦面に設定した11トレンチで、陶器の壺に納められた経筒を発見し、この地点が経塚であることが判明した。



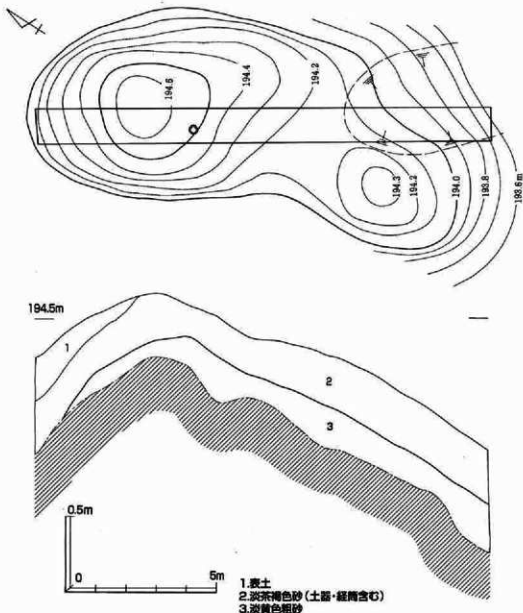
第5図 №3地点調査風景

## 第2節 経塚

## 位置

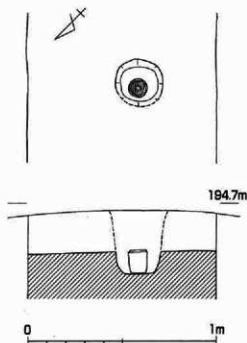
南に向かって延びる細長い尾根が、いったんラクダの瘤状に高くなった標高194.6mの高まり上に位置する。この高まり自体は砂礫層で構成されていることから、大阪層群と考えられる。しかし、5mほど下がると岩盤層があり、これと断層によって不整合となっているのだろうか、神戸層群もみえている。

この場所からは、北東の淡河方面は一望の下に見渡せ、死角がない。一方の、南西のふもとにある戸田の集落や、志染方面は谷が深く切れ込んでいて眺望が良くない。しかし、丘陵上にそびえる神出地方の雄岡山、雌岡山がよく見える。

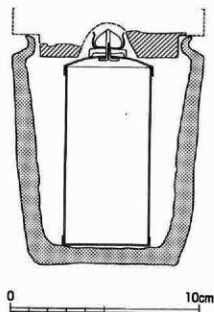


第6図 経塚地形測量図・断面図





第7図 経塚の埋納坑



第8図 経筒の収納状態

地形（第6図）

山頂部は、幅10m足らずの範囲が緩斜面をなしており、それをこえると両側は崖のような急斜面である。ここに南北に並ぶふたつのこぶのような盛り上がりがある。北側の方が大きく、なだらかで高い。なお、南東側の鞍部斜面に攪乱状の窟みがあり、バラバラになった須恵質と土師質の土製容器片が出土している。

経筒の出土状態（第7図・第8図）

経筒は北側の高い方の頂点から2mばかり南の地点で出土した。確認調査で外観上、尾根筋の平坦な斜面であり、基盤層が硬くしまった礫層だったため、つるはして掘削をしていたところ、不本意ながら外容器につるはしがあたってしまい、遺物の存在を確認した。

したがって、十分に埋納状態が把握できていないが、周囲を精査した結果、ほぼ、直径20cm、深さ30cm程度の素掘りの穴を掘り、経筒を納めた外容器を立てた状態で埋めていたと推定できた。掘削の際、外容器が破損、経筒の表面が損傷したが、その時に外容器内より液体が流れたようである。このため、外容器の中には、水が溜まっていた可能性が高い。

また、経塚が出土した場所のそばに30～40cm程度の大きさと厚さ10cm前後の板状の石があったため、蓋石の可能性もあるが、石自体は原位置を保っていないため詳細は不明である。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 経塚の遺物

経塚に伴う遺物は、外容器・木製蓋・経筒・経巻である。

#### (1) 外容器 (第10図)

口径8.5cm・器高11.95cm・底径9.5cmの陶製の壺である。形態は、体部は、底部から筒状に立ち上がり、肩部は張り、口縁部は短く外反する。口縁端部は非常にシャープに仕上げられている。ロクロで成形されたもので、体部外面上位には横方向のナア仕上げを行なう。外面裾部は、横方向にヘラケズリを施す。体部内面は、少しロクロ目が残る。底外面にヘラ彫りで窠印「×」がある。

胎土は灰色で焼成は良く、大変堅緻である。器表は茶褐色を呈している。口縁端部と肩部の表面、底部の内面に灰黄色の胡麻状の自然釉が認められる。これより、この壺は、蓋のない状態で焼成されたと考えられる。

#### (2) 木製蓋 (第10図)

外容器には、木製の蓋が被さっていた。木蓋の残存径は6.5cm×8.9cm、残存高1.4cmで、上部は朽ちてなくなっているため、当初の蓋の形態は不明である。木蓋の下部は、外容器の窓に栓がけできるように、径7.25cm・高さ1.15cmの逆凸型の加工を行なっている。周囲の加工は丁寧に行なっており、表面のけぼだちなどはない。また、中心部には、最大3.3cmの穴がくり抜いてあり、経筒の蓋の宝珠と受花の蓮弁を上折り曲げて、その穴に収めていた。木の種類は不明であるが、肉眼観察により針葉樹と判断した。

#### (3) 経筒 (第11図)

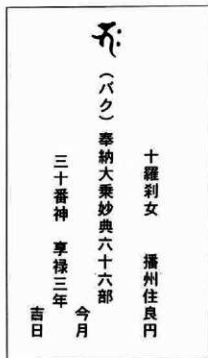
筒身

高さ11.4cm(蓋2.6cm・筒身9.4cm)直径4.7cmの円筒形の銅製経筒である。筒身は1枚の銅板(厚さ約0.1cm)を折り曲げて、上部は、舌(幅0.8cm・高さ0.4cm)を内側に折り曲げ、合わせ目3ヶ所には舌(幅0.4cm・高さ0.8cm)をはめ込み固定している。底板は、被せ式の平底で、銅板を円形に切り抜き、上に折り曲げている。筒身からは二ヶ所に、舌(幅0.7cm・高さ0.4cm)を出し、底板に、この舌をはめ込み固定し、内側に折り曲げている。

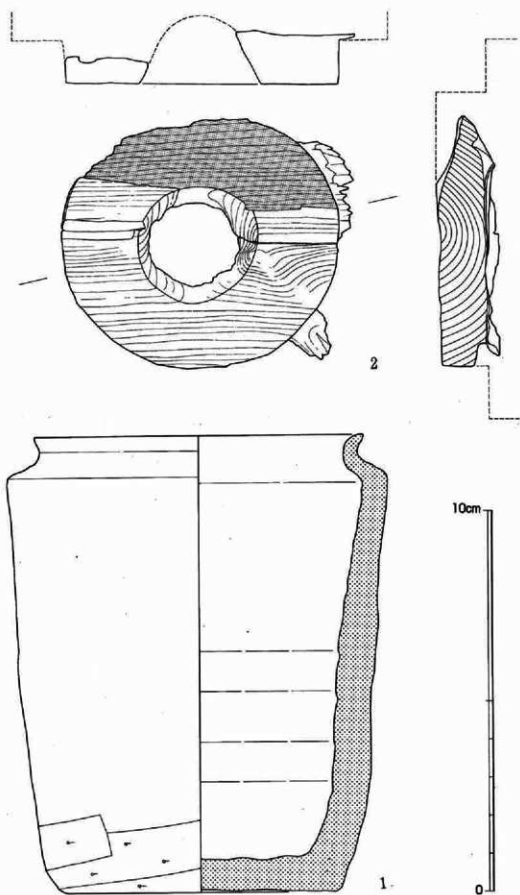
出土時には、経筒は泥緑青に覆われて、銘文の判読が困難であったが、保存処理作業を行なった結果、筒身の銘文が明確になった。

銘文より、この経筒は、播州の住人良円が、廻国納経のため、享祿三年(1530)に納めたことがわかる。(第9図)

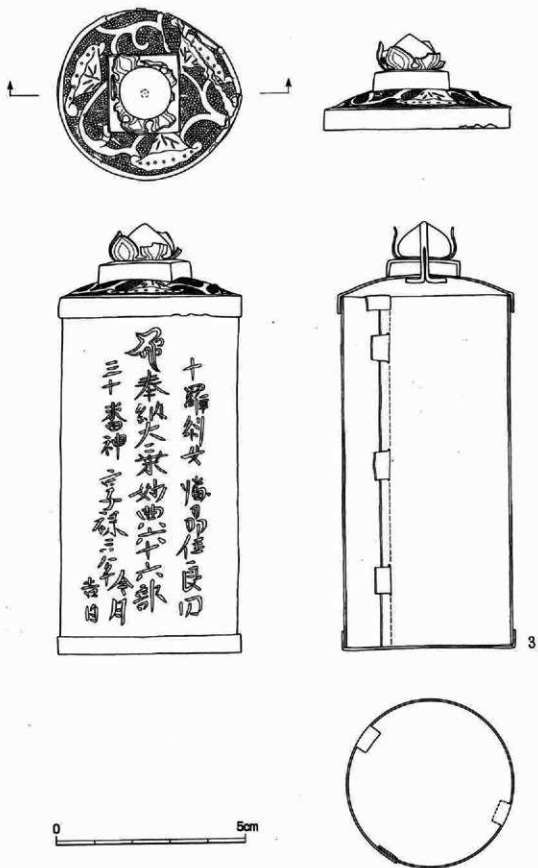
この保存処理作業によって、錆落としを行なった結果、経筒は鍍金を施していることが判明した。鍍金は、大変薄く、



第9図 経筒銘文



第10圖 外容器と木製蓋



第11圖 鏡筒

銘文の刻線の中にも鍍金が施されていた。また、筒身の下1/3には、第一酸化銅が付着していた。これは、ある期間、経筒が水につかっていたために付着したと考えられる。このことは、筒身の底板の遺存状況が良くなかったことから裏付けられる。

その他、筒身の胴部には、何本かの横方向の擦れ傷が確認できる。製作時か運搬時にできた傷であろうか。

現在までに確認されている経筒の中で、保存処理作業を経て、当時のように鍍金を甞らせている例は少なく、製作技法・過程を考えるうえで、大変有意義であったと考える。

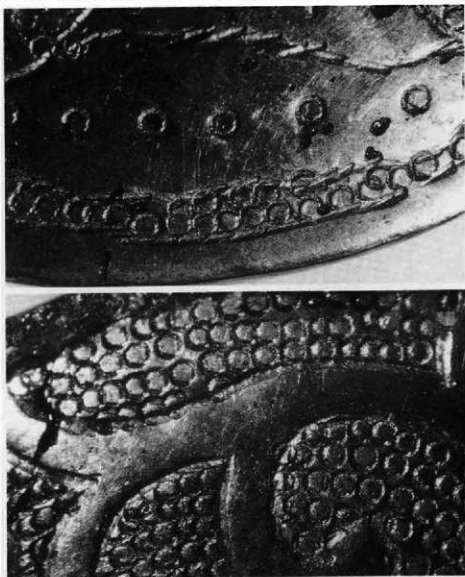
#### 蓋

蓋は銅板製の被せ蓋である。露盤の上に八弁の受花・宝珠からなるつまみを鉾で留めている。

表面は魚子地にレリーフ（浮き彫り）で三方に蓮華を配し、そのまわりに唐草文がとりまく蓮唐草文<sup>27</sup>である。

また、花卉には内側から子葉を打ち、外容器の木製蓋に収まるように上に折り曲げていた。

蓋も筒身と同様に鍍金が施され、刻線の中にも鍍金が施されていた。



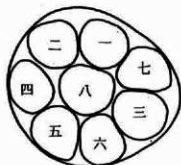
第12図 蓋の拡大写真

## (4) 経巻(写真図版6~38)

経筒内に納められていた経巻は、法華経八巻である<sup>9)</sup>。経巻の遺存状態は予想以上に良く、ほぼ完全な形で残っていた。

## 配置状況(第13図)

経巻は経筒の中に、中央に1巻、まわりに7巻を配して納められていた。3巻のみ位置が違うが他は1巻から順番に反時計回りに納めている。木製の経軸はなく、中央の巻(第8巻)のみが、紙(楮)で作ったこよりを経軸にしていた。



経筒正面

第13図 経巻の収納状態

経巻はいずれも外題を表に向けていた。つまり、

写経が済んだ後、経巻を巻き戻し、外題を表にして納めていた。

## 紙(料紙)の状況

経巻の紙はいずれも楮紙である。経巻は幅約9cm・長さ140~196cmで、5紙から6紙を右下左上につなぎ合わせている。経巻は緑青の影響を受け、緑色の古色をおびていた。各経巻の計測値は第3表のとおりである。経巻は、外側(巻首)部分と内側(巻末)の部分の損傷が大きかった。顕微鏡の観察によると劣化は進んでいるようである<sup>10)</sup>(第19図)。

## 経文

経文は、上下1cmほどの空白をおいて、基本的に1行17字で写経されていた。文字は約縦3mm×2mmで大変細字である。

巻首の裏側に外題を記している。外題は、><(以字点) 妙法蓮華経巻第〇(数字) 子(バク)と記されていた。首題は、妙法蓮華経各品の名前が記され、尾題は妙法蓮華経巻第〇(数字)と記されている。また、紙のつなぎめに文字が記されているため、あらかじめ紙をつなげておいてから写経を行っていたと考えられる。第一・二・四巻には首題の下にそれぞれ一・二・三(1・2・4)の巻名を示す漢字が記されていた。

基本的には、1行17字である。特徴としては、行末の文字をそろえるため、行の長さが足りない于行末の文字を2度繰り返して書き、行のバランスを取っている。また、各行の上半分は、字間をつめて写経を行なっているが、行末になると文字間が開いている。誤字・脱字の場合は、行末などに書き加えてあった。

書き手についてであるが、書き手は右払いや縦棒を長く延ばす癖があるらしく、各巻共通してみられる特徴である。このため、書き手はひとりであった可能性が高い。参考までに、法華経でよく使われる文字を各巻抽出して挙げておく(第2表)。

その他、楮紙の断片が経筒の内部に付着していた(写真図版37)。文字のようなものが書かれている

るが、判読できなかった。

第2表 各経巻主要文字抽出表

	一卷	二卷	三卷	四卷	五卷	六卷	七卷	八卷	経簡
大	大	大	大	大	大	大	大	大	大
羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅	羅
佛	佛	佛	佛	佛	佛	佛	佛	佛	
妙	妙	妙	妙	妙	妙	妙	妙	妙	妙
菩薩	菩薩	菩薩	菩薩	菩薩	菩薩	菩薩	菩薩	菩薩	

注

- (1) 兵庫県史編集室の任洋二氏のご教示によると「今月吉日」の「今」の字は「令」とも読みとれる。この報告では前例にならって「今月」としたが、令月の可能性もある。令月とは、「①めでたい月。すべて物事を行うのによい月。②陰暦2月の異称。」とされている（『日本国語大辞典』小学館1976）。
  - (2) 蓮子の部分が特徴的のため、蓮実の可能性もあるが、蓮子の周囲が簡略化された花卉と解釈し、蓮華文とした。
- 上原真入 「蓮華文」 『日本の美術』No.359 至文堂 1996
- 河田 貞 「蓮・夏草」 『日本の文様』25 光琳社 1985
- (3) 坂本幸男・岩本 裕 『法華経』上中下 岩波書店 1967
  - (4) 高知県立紙産業技術センターの大川昭典氏に分析していただいた。  
大川昭典 「和紙繊維の調査」 『月刊文化財』281 第一法規 1987
  - (5) 飯高本宏・赤尾栄彦 『写経の鑑賞基礎知識』 至文堂 1994

第3表 經卷計測表

單位 (cm)

卷	紙數	1	2	3	4	5	6	天地寸法	計
第一卷	修復前	11.8	39.4	38.0	38.3	37.2	2.1	9.0	166.8
	修復後	11.9	39.65	39.3	39.1	38.3	2.3	9.0	170.65
	備考	序品第一		方便品第二					
第二卷	修復前	36.2	33.2	33.2	32.5	30.7	24.9	9.0	190.7
	修復後	37.2	33.9	33.8	33.0	31.7	26.4	9.0	196.0
	備考	譬喻品第三			信解品第四				
第三卷	修復前	31.2	35.7	38.2	6.6	38.7	26.7	9.0	177.1
	修復後	31.8	36.5	38.8	6.6	39.3	27.1	9.0	180.1
	備考	藥草喻品第五 授記品第六	化城喻品第七						
第四卷	修復前	31.2	31.6	31.4	31.5	31.1	6.2	9.2	163.0
	修復後	31.9	32.2	32.1	32.2	32.0	6.4	9.2	166.0
	備考	五百弟子授記品第八	興子無過子人記品第九 (授學無學人記品第九)	法師品第十	見寶塔品第十一				
第五卷	修復前	24.8	31.5	31.2	31.2	30.8	24.9	9.2	174.0
	修復後	25.3	31.9	32.0	32.1	31.8	26.4	9.2	179.5
	備考	提婆達多品第十二	勸持品第十三	安樂行品第十四		(從)地滿出品第十五			
第六卷	修復前	30.8	31.2	31.3	31.2	30.8	11.8	9.1	167.1
	修復後	31.4	32.0	32.0	32.1	31.8	12.3	9.1	171.6
	備考	如來壽量品第十六	分別功德品第十七	隨喜功德品第十八	法師功德品第十九				
第七卷	修復前	18.5	31.6	38.7	38.2	24.3		9.0	151.3
	修復後	19.1	32.0	39.7	39.0	25.3		9.0	155.1
	備考	常不輕菩薩品第二十	如來神力品第二十一	囑累品第二十二 藥王菩薩本事品第二十三	妙音菩薩品第二十四				
第八卷	修復前	13.2	38.9	38.6	38.1	9.4		9.0	137.2
	修復後	13.4	39.8	39.4	39.1	9.7		9.0	140.4
	備考	觀世音菩薩普門品第二十五	陀羅尼品第二十六	妙莊嚴王本事品第二十七	普賢菩薩勸免品第二十八				



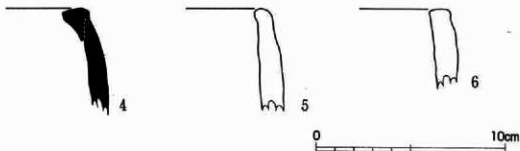
第2節 その他の遺物

(1) 土製容器片

経筒出土地点の南東部斜面の攪乱坑から出土したものである。須恵質のものが10片、土師質のものが6片ある。口縁部は前者が1点、後者が2点ある。それぞれ同一の個体に属するものであろう。

4は須恵質のものの口縁部である。やや内傾した口縁端部に内側に向けて玉縁状に粘土を貼り付けてある。小さい破片であるので、口径は復元できなかったものの、体部片からみると、厚手でぼてっとした筒形の直線的に立ち上がる体部と、内側に湾曲した口縁部を持った、経筒の外容器によく用いられる形状が復元できそうである。焼成状態は良好で、硬く焼き締まっている。

5と6は土師質のものの口縁部である。2片あって、端部の形状が異なるが、部位による差とみられる。小片であるために正確さを欠くものの、わずかに内傾しているようである。体部はやはり筒状をなすようで、輪積みの痕跡が随所に認められる。これも経筒の外容器によく用いられる土器に似ている。



第14図 土製容器片

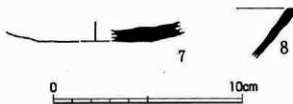
(2) 須恵器

上記の土製容器以外の遺物は数が大変少ない。すべて須恵器碗の破片で、いわゆる東播系須恵器と称されるものである。このうち2点を図示した。

7は、底部の破片である。やや残めの碗の底部で、外底面には回転糸切り痕がある。形状から判断すると13世紀代の年代が与えられる。

8は、口縁部片である。端部は丸く収めてある。年代は7と大差ないであろう。

これらの須恵器はNo.3地点の4・5トレンチから出土したものである。



第15図 No.3地点出土の土器

## (3) 鉄器

9は3トレンチの斜面流出土中から出土した、鉄製U字形鍬・鋤先である。いわゆる風呂鍬・風呂鋤と称される木製耕起具の刃先として使用されたものである。

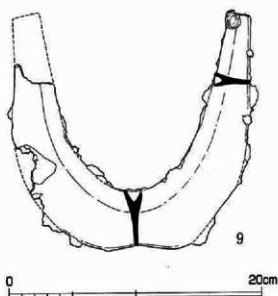
耳部の一部を欠くものの、全体の形状はほぼつかめる。刃先は円いが、先端部がかなり摩耗しているようで、くぼんでいる。このことから、実際に使用されたものであることがわかる。全長は18.8cm、耳部の推定最大幅は約19.0cmである。

木製風呂鍬を受ける溝はV字形をなしており、2枚の板を鍛ち合わせたものようである。

年代を判定することは、困難であるが、至近距離に中世初頭の開墾地があることから、状況証拠ではあるが、帰属年代をこの頃に置けるのではないかと考えている。ただ、これまでの研究<sup>1)</sup>では、刃先部の形状からだけでは鍬と鋤とを判別することは難しいようである。したがって、この鉄製品が、新たな畑地の開墾に使用されたものか、日常的な耕起作業に使用されたものかの判断は難しいことになる。

注

- (1) 松井 和幸 「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」『考古学雑誌』72-3 1986



第16図 No.3地点出土の鉄器

## 第5章 保存処理

### (1) 保存処理作業の経過

出土した経筒は、埋蔵文化財調査事務所に持ち帰り、冷蔵所に保管していたが、整理作業開始にあたって、保存処理作業を行なった。まず最初に、経筒表面にみられた銘文の判読と、内部状況の確認を目的として、X線透過試験を行なった。これにより、経筒の蓋および筒身の構造は確認できた。しかし、この段階では内部の経巻の存在は確認できず、銘文の全容についても、字体の彫り込みが浅く、筒上に彫られているために歪みがあり、非常に読み取りにくい状況であった（写真図版4）。

しかし、経筒は、かなり重みがあり、経巻が内部に残存している可能性もあったため、次の段階として、経筒の蓋を開くために、メスによって蓋と身の接合部分の錆落としを行なった。蓋と身の接合部分に癒着した錆を慎重に取り除いて、蓋を開けたところ、経筒の中に経巻8巻が詰まった状態で納められていた。経巻は湿気を多く含み、外観上は非常に遺存状態が良いようにみうけられたが、経筒内でそのまま放置すれば、乾燥やカビなどで紙の腐敗が進む可能性があるため、現状の写真撮影を行なった後、京都国立博物館文化財保存修理所（阿墨光堂）に取り出しと修復を依頼した。

### (2) 経巻の修復（第17図）

経巻の取り出し作業は経巻を持参した7月12日当日に行なわれた。経巻の遺存状態は予想以上に良く、ほとんど破損せず全巻を開くことができた。その後、経巻の遺存状態が良好であったため、経巻の欠損した部分にだけ修復を行なった。その順序は次の通りである。

1. 経巻を取り出す。
2. 経巻を開く。
3. 経巻を1紙ごとに分解する。
4. 経巻に水を含浸し、伸ばす。
5. 欠落した部分に、別の楮紙で繕いを行なう。
6. 本紙の裏から別の紙を水で張り合わせ、板の上のせ、伸ばす。
7. 本紙を板と紙にはさんでプレスした状態のままで、常温で1週間ほど乾燥させる。（仮張り）
8. 別の紙を本紙からはずし、1紙ずつ貼り合わせ、もとの経巻に戻す。

緑青の影響で、全体が緑色の古色を帯びているため、風合いを損ねないよう、裏打ちなどは行なっていない。また、修復と同時に保管のため、特製の銅製の収納箱と経軸を作った。

### (3) 経筒の保存処理

経巻の修復と並行して、経筒の保存処理作業も行なった。経巻が取り出された後、筒身と蓋をベンゾトリアゾール3%のメチルアルコール溶液にて脱塩処理を行なった。

経筒の出土時には、経筒は泥と緑青に覆われ、経筒に銘文があることは辛うじてわかったが、判読するには至らなかった。

経巻を取り出した後、経筒内に厚さ1mmの鉛板を丸めて間にX線フィルムを挟み込み、再度X線透過試験を実施したが、破損を受けている年号部分の判読は困難であった。開かれた経巻には、奥書がなく、経筒の方に年号や人名が銘文されている可能性が高いため、X線撮影による判読不能部分の早急な錆落



1. 経巻を取り出す。



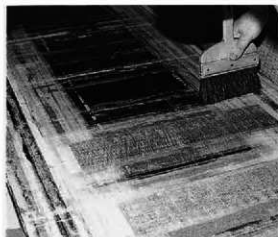
2. 経巻を開く。



3. 経巻を1紙ごとに分解し、経巻に水を含浸して伸ばす。



4. 欠落した部分に別の襖紙で糊いを行う。



5～8. 糊いを行った経巻を再び伸ばし、その後、一紙づつ張り合わせて、元に戻す。



9. 現在の経巻の保管状況

第17図 経巻の修復過程

としての必要性がでてきた。そこで、表面の緑青の状態は良かったが、奈良国立文化財研究所の指導のもと、化学的なキレート剤（EDTA：エチレンジアミン四酢酸三ナトリウム・三水物）による錆落としを行なった。

表面の鍍金層が薄いため、キレート剤の水溶液 2～5% で数回の錆落としを行なうと、銘文の中にも鍍金があり、毛彫りの状態を確認できた。また、経筒の下1/3は、水に浸かっていたためか、赤褐色の第一酸化銅が付着していることがわかった。この第一酸化銅は、キレート剤では取れにくいので、物理的にメスによって錆取りを行なった。その結果、経筒の銘文が判読でき、また蓋の魚子地模様も、より鮮明になったのと同時に鍍金がよみがえり、往時の姿をほぼ復元することができた。このうち、パラロイドB72の10%溶液に含浸した。

#### (4) 経筒の成分分析（第18図）

経筒の成分分析については、キレート剤による処理後に奈良国立文化財研究所遺物処理室室長肥塚隆保氏に依頼した。

分析方法は、非破壊による微小エネルギー分散型蛍光X線分析装置にて実施した。しかし、表面の鍍金層が非常に薄く定量分析はできず、表面のみの定性分析にとどまった。その結果、銅・金・水銀と微量の銀の存在が検出されたため、アマルガムによる鍍金仕上げであると考えられる。

しかし、底板は肉眼でも金の痕跡は認められず、分析でも金は検出されなかった。

#### (5) まとめ

現在、経巻は、紙の劣化を予防するため、桐の経軸に巻かれ箱底より浮かした状態で桐の箱に収納され、空調室にて保管されている。経巻が全巻ほぼ完存している例は、埋納経としては珍しく、広く一般に公開する重要性は大きい。埋納時と現在の保管との環境変化は大きいので、どのような保管管理が望ましいかは、今後の課題である。

また、経筒についてもキレート剤による化学的な保存処理を行なったのち、樹脂含浸処理を施しているが鍍金層も薄く、将来的に劣化が進まないか経年変化を記録する必要がある。

#### 経塚整理作業記録抄

平成7年2月17日	経筒出土
平成7年2月20日	埋蔵文化財調査事務所に持ち帰り冷蔵庫にて保管。
平成7年3月11日	X線透過試験を行なうが経巻は確認できず。
平成7年6月～7月	経筒の蓋を開けるための錆落とし。
平成7年7月7日	経筒の蓋を開ける。経巻8巻完存。
平成7年7月10日	埋蔵文化財調査事務所にて経筒内の経巻の収納状況写真撮影。
平成7年7月12日	岡墨光堂にて経巻取り出し。
平成7年7月12日～11月8日	岡墨光堂にて経巻修復作業。
平成7年9月19日	奈良国立文化財研究所にて経筒をキレート剤で処理
平成7年11月17日	奈良国立文化財研究所にて外容器・木製蓋・経筒写真撮影
平成7年11月21日	記者発表

第5章 保存処理

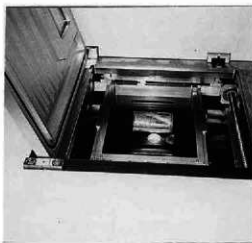
平成7年11月24日～26日	埋蔵文化財調査事務所にて「勝継経塚」展示会
平成7年12月13日～14日	奈良国立文化財研究所にて全経巻写真撮影。
平成8年2月10日～20日	平成7年度速報展にて展示。
平成8年4月～	遺構・遺物図面作成
平成8年8月	集合写真撮影

注

(1) (株) 岡屋光堂の作業工程による。



実体顕微鏡による銷落とし



経筒の分析（蛍光X線分析）



キレート剤による銷落とし（筒身）



キレート剤による銷落とし（蓋）

第18図 経筒の保存処理作業

## 第6章 勝雄経塚経巻の織維について

第6章は  
公開していません



## 第7章 まとめ

(1) 六十六部廻国納経について<sup>1)</sup>

勝雄経塚は、出土した経筒の銘文と形態から、16世紀代を中心に流行する六十六部廻の廻国納経に係る経塚と考えられる。六十六部廻は、廻国廻とも呼ばれ、法華経を六十六部写経して、これを一国に一部ずつ写経してまわる廻の事である。これらの廻は、諸国をめぐる法華経信仰を広め、諸国の霊場に法華経をいれた経筒を奉納したり、各国に経塚を造営している。

六十六部廻は、中世に出現するが、その前身をなすと考えられる法華経の廻については、古くは古代の山岳修験者にまで遡ると言われている。六十六部廻と経筒での奉納の結び付きも13世紀代末頃から14世紀代初め頃にかけて埋納された経筒にその初源的な段階とみられる銘文が遺存している。しかし、この時期の経筒は、ごくわずかであり、六十六部廻と経筒奉納との結び付きが本格化するの、16世紀になってからである。

平安時代に流行する経塚の造営は、社会の危機感から、仏典を写経し土中に埋納し、末法の世まで経典を保存する事が主な目的であると考えられている。しかし、中世の廻国納経の経塚は、古代のものとは性格が異なり、施主の現世利益や、追善、逆修供養のため営まれたものが多い。

現在まで、六十六部廻による廻国納経の経筒は全国で110ヶ所以上、約300点ほど確認されている。いずれも器形がある程度規格化されており、筒身に記載されている銘文の書式も類似しているのが大きな特徴である。

兵庫県内の廻国納経の経筒は勝雄経塚を含めて5例ある<sup>2)</sup>(第7表)。寺社に直接奉納したものではなく、いずれも埋納されていたものである。

第7表 兵庫県内の廻国納経の経筒<sup>3)</sup>

地名	所在地	経筒	年号	人名	銘文	経典	外容器 副葬品	番号
勝雄	神戸市北区 淡河町勝雄	銅板製鍍金円筒形経筒	享禄三年 (1530)	播磨住良円	大乗妙典六十六部	法華経八巻	陶製壺 木蓋	73
吉尾	神戸市北区 八多町吉尾	銅板製鍍金円筒形経筒		下馳国 覺藏坊	大乗妙典六十六部 并丙		備前烧壺 銭貨9枚	30
狐塚	神戸市墨水区 名谷町湯谷ヶ谷	銅板製鍍金円筒形経筒		駿河 月照上人	大乗經典一箇六十六部		瓦製壺片 銭貨4枚	31
一本松	三原郡三原町 櫻判	六角宝輪式経筒		常州 成福坊	六十六部廻		銭貨2枚	59
一色	加古川市平岡 町一色	鉄製六角宝輪式経筒	元禄元年 (1558)				人骨	63

## (2) 出土遺物の検討

### 外容器

今回出土した壺は、一見すると備前焼と酷似する。形態的には、肩衝茶入と呼ばれる小壺の形態であるが、通常知られている肩衝茶入は、器高7cm程と小さく、勝雄経塚出土のものは器高12cmと、それに比べ大振りである。伝世品・出土品を含めた管見では、このような肩衝壺<sup>96</sup>は知られていない。

しかし、この壺の中に、享禄三年(1530年)銘の経筒が入っていたことは、この壺の時期を決める大きな手掛かりになると考える。もし備前焼であるとすれば、大窯特有の黒印がみられることから、いまのところ大窯の時期(間壁編年V期<sup>97</sup>・16世紀代)と考えている。この壺の生産地等の詳細な検討は、類例の増加を待って再度検討を行いたい。

### 経筒

出土した経筒は、10cm程の器高、銘文の書式から見て、他の廻国納経の経筒と変わりない。銘文の意味通り、六十六ヶ所に奉納したかどうかは不明だが、現在まで確認されている廻国納経の経筒で、「播州住 良円」銘の経筒は当経塚以外には見つかっていない<sup>98</sup>。

また、保存処理作業を行なった結果、銘文・模様刻線の中に鍍金が施されていた。このことから、銘文・模様は彫り込みを行った後に鍍金を施した可能性がある。他の資料は、緑青に覆われたままのものが多く<sup>99</sup>、製作過程を知るうえで、注目できる。

蓋は、他の例と比較してみると、凝った細工を施している。今のところ、この蓋と同一の例は、知られていない<sup>100</sup>。

### 経巻

経筒内に納められた経巻は、紙のため、発見時には、朽ちてなくなっている場合が多い。廻国納経の経筒でも、経巻が当時の形をとどめる例は皆無であった<sup>101</sup>。このため、銘文の大乗妙典(=法華経)から、この種の銘文の経筒の中には法華経を納入したと考えられていた<sup>102</sup>が、勝雄経塚の経巻完存により、改めて、廻国納経の経筒には、埋納経典として、写経した法華経を納めていることが判明した。

## (3) その他の問題点

経塚は、遺物の発見が偶然な事もあって、立地なども不明なものが多い。銘文にみえる廻国納経の意味の上では、経筒は全国六十六ヶ所の著名な霊場か、あるいは、その関連する場所で発見されると予測できるが、実際は、全国六十六ヶ所の霊場やその関連する場所からの出土は少ない結果となっている<sup>103</sup>。勝雄経塚の場合も、現在は丘陵尾根のため、旧状は不明で、立地上の意味は現在のところ不明である。

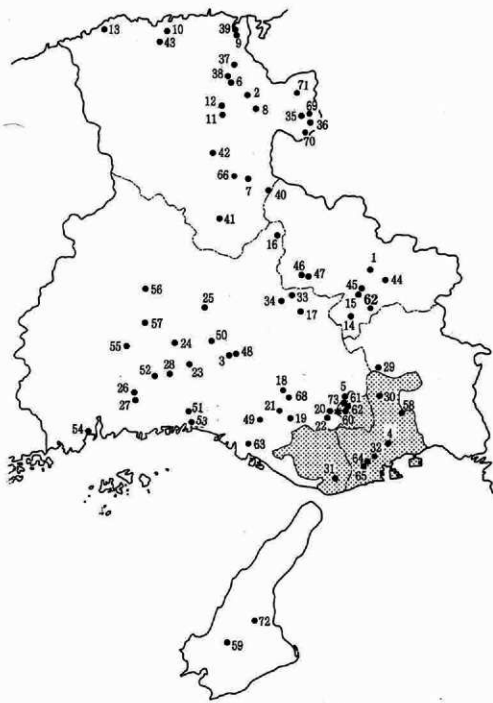
しかし、周囲には古刹である伽耶院・石峯寺等があり、淡河町付近は、古代の経塚が点在する地域<sup>104</sup>であるため、何らかの宗教空間であった可能性は考えられる。

その他、勝雄経塚の注目すべき事例として、外容器の使用がある。廻国納経の経筒の場合、寺社への奉納と土中に埋納するものがあるが、土中に埋納する場合でも、外容器などの保護容器が使用される例は少ない。外容器の使用は、石製・陶製をあわせて全国でも15例ほどで、陶製のものだと勝雄経塚で7例目<sup>105</sup>である。この陶製の外容器のうち半数近くが、兵庫県内出土のものであることは、廻国納経の

性格を考える上で、興味深い。

注

- (1) 六十六部聖の題圖納経の経塚の研究・集成については、関秀夫氏の研究に負うところが大きい。  
関 秀夫 『経塚』 考古学ライブラリー33 ニューサイエンス社 1985  
「六十六部聖による納経の経塚」「経塚—関東とその周辺—」東京国立博物館研究図録 東京国立博物館 1988  
『経塚の諸相とその展開』 雄山閣 1990  
『経塚とその遺物』『日本の美術』No.292 至文堂 1990
- (2) 森内秀造 『兵庫の経塚』 博物館普及資料第10集 兵庫県立歴史博物館 1992
- (3) (2)以外に、  
藏田 蔵 『経塚論』八、東京国立博物館保管近畿地方出土の経塚遺物(中)『MUSEUM』第178号 1985  
『神戸の文化財』 神戸市立博物館 1983  
森内秀造 特別展『願いかなえたまえ—古代の呪術と信仰—』展示会図録 兵庫県立歴史博物館 1990  
真野 修 『沿線の遺跡を訪ねて』名谷・狐塚経塚 『山陽ニュース』 550号 1995  
三宅敏之 『六角宝輪式経筒について』『経塚論』 雄山閣 1983  
岡本 稔 『第8編第6章第4節 金石遺品』『三原郡史』 三原郡町村会 1979
- (4) 桂又三郎 『備前』陶磁大系10 平凡社 1973  
伊藤 晃・上西節雄 『日本陶磁全集10 備前』 中央公論社 1977  
関壁忠彦 『備前』『世界陶磁全集3 日本中世』 小学館 1977  
『古備前—木村コレクション—』図録 岡山県教育委員会 1984  
『桃山の茶陶』 根津美術館・大阪市立東洋陶磁美術館・日本経済新聞社 1989  
矢部良明 『備前』『日本の美術』No.291 至文堂 1990
- (5) 関壁忠彦 『備前』 考古学ライブラリー60 ニューサイエンス社 1991
- (6) 関 秀夫 『経塚の諸相とその展開』 雄山閣 1990  
伽耶院住職の岡本孝道氏の教示により、伽耶院所蔵の大般若教の写経者に良圓の名があることを知り、兵庫県立歴史博物館学芸員小林基伸氏とともに金600巻を調査した。この良圓なる人物は写経の年代から嘉暦二年(1327年)ころの人物であることが判明し、経筒に記された良円とは別人物であることがわかった。また道礼研究会によると、良円が伽耶院などの山岳修験道に関連した人物だとすれば、熊野那智大社文書にその名が残されているかもしれないという。今回の報告ではそこまでの調査を行えなかったが、今後調査すべき重要な問題である。
- (7) (6)に同じ
- (8) (6)以外に  
関 秀夫 『経塚—関東とその周辺—』東京国立博物館研究図録 東京国立博物館 1988  
関 秀夫 『経塚とその遺物』『日本の美術』No.292 至文堂 1990  
『経塚遺宝』 奈良国立博物館 東京美術 1977  
小田富士雄・武末純一 『「経塚遺宝」展—北九州市とその周辺—』 北九州市立考古博物館 1986  
田代 孝 『第十一回特別展 山梨の経塚』 山梨県立考古博物館 1983
- (9) (6)に同じ。
- (10) (6)に同じ。
- (11) (6)に同じ。
- (12) (2)に同じ。
- (13) (6)に同じ。



第20図 兵庫県下の経塚

第7表 兵庫縣経塚地名表（「兵庫の経塚」より）

	名称	所在地		名称	所在地
1	上板井	多紀郡西紀町上板井	38	金山	豊岡市高屋
2	田多地	出石郡出石町田多地	39	宝塚	豊岡市気比
3	江ノ上	加西市谷口町江ノ上	40	栗實神社	朝来郡山東町栗實
4	滝ノ奥	神戸市灘区高羽	41	谷ノ上	朝来郡朝来町羽瀨
5	石峯寺	神戸市北区淡河町神影	42	新宮山	養父郡養父町十二所
6	妙楽寺	豊岡市妙楽寺	43	三谷	美方郡浜坂町三谷
7	楽音寺	朝来郡山東町楽音寺	44	平石山	多紀郡篠山町火打岩
8	入佐山	出石郡出石町材木	45	諏訪腰	多紀郡丹南町味間奥
9	太平寺	豊岡市気比	46	立石	水上郡山南町草部
10	下浜	城崎郡香住町下浜	47	丸山	水上郡山南町奥
11	比曾寺	城崎郡日高町垣垣	48	栗田	加西市北条町栗田
12	馬場ヶ先古墳	城崎郡日高町鶴岡	49	二塚古墳	加古川市神野町西神野
13	松村	美方郡浜坂町田井	50	西田原	神崎郡福崎町西田原
14	小野原住吉	多紀郡今田町小野原	51	宮山	姫路市飾磨区妻鹿
15	西山北古墳	多紀郡丹南町西古佐	52	鶏足寺	姫路市
16	鳥羽	多可郡加美町鳥羽	53	甲山	姫路市妻鹿
17	福地	多可郡黒田庄町福地	54	八祖山	赤穂市板越
18	敷地宮林	小野市敷地町宮林	55	家氏	播磨郡新宮町香山
19	在田寺	三木市別所町道田	56	滝ノ内	穴栗郡一宮町伊和
20	伽耶院	三木市志染町大谷	57-1	今念寺	穴栗郡安富町名坂
21	王子神社	三木市別所町石野	57-2	関善寺	穴栗郡安富町名坂
22	高男寺	三木市志染町高男寺	58	有馬温泉寺	神戸市北区有馬町
23	極楽寺	神崎郡香寺町須加院	59	一本松	三原郡榎列小榎列
24	愛宕山	飾磨郡夢前町杉の内	60	北坊	神戸市北区淡河町神影
25	山王	神崎郡市川町沢	61	萩原	神戸市北区淡河町萩原
26	山吹山	龍野市龍野町宮脇	62	北別	神戸市北区淡河町萩原
27	楽々山	龍野市菅田町内山	63	一色	加古川市平岡町一色
28	書写	姫路市書写	64	二本松古墳	神戸市兵庫区会下山町
29	下深田	三田市下深田	65	池田	神戸市長田区池田経町
30	吉尾	神戸市北区八多町吉尾	66	殿一乗寺	朝来郡和田山町殿
31	狐塚	神戸市垂水区名谷	67	上小野原	多紀郡今田町上小野原
32	清水	神戸市兵庫区千鳥町	68	王塚古墳	小野市王子町宮山
33	石原	多可郡黒田庄町石原	69	ホウキザキ	出石郡但東町栗尾
34	円満寺	多可郡中町西安田	70	久畑	出石郡但東町久畑
35	清滝神宮	出石郡但東町栗尾	71	畑森	出石郡但東町畑山
36	大生部兵主神社	出石郡但東町薬王寺	72	千光山	洲本市上内膳
37	野上	豊岡市野上	73	勝雄	神戸市北区淡河町勝雄

写真図版



調査地遠景（北東から）



調査地遠景（南西から）



調査地からみた淡河方面



11トレンチと埋納坑（北から）

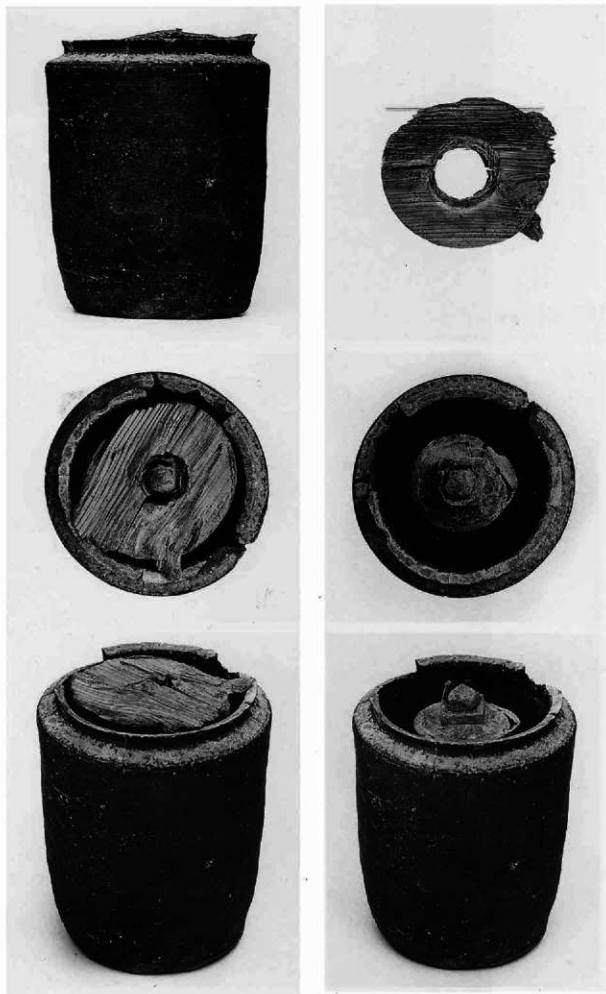


経筒出土状況（北から）

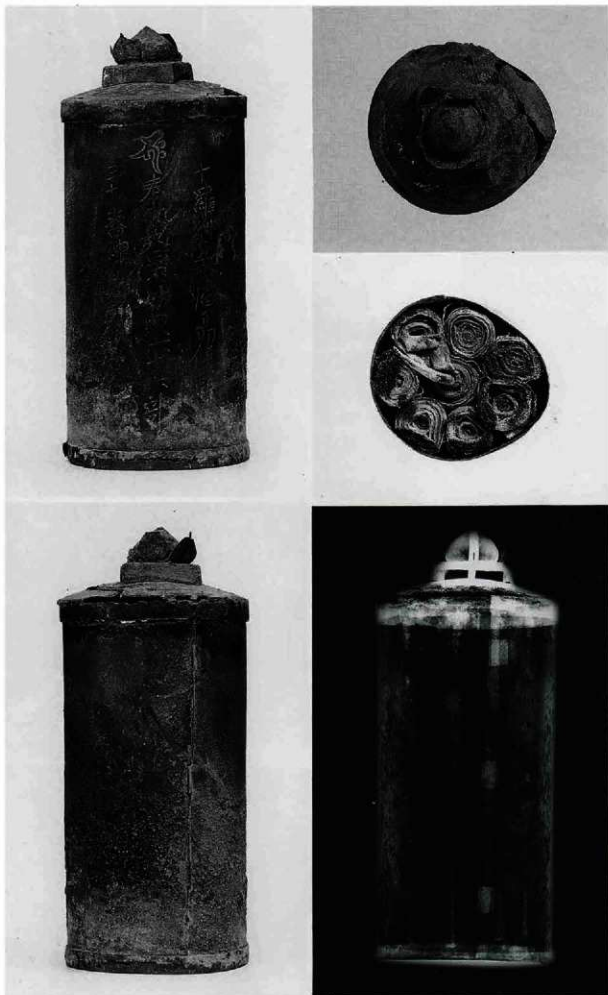


経筒出土状況（真上から）

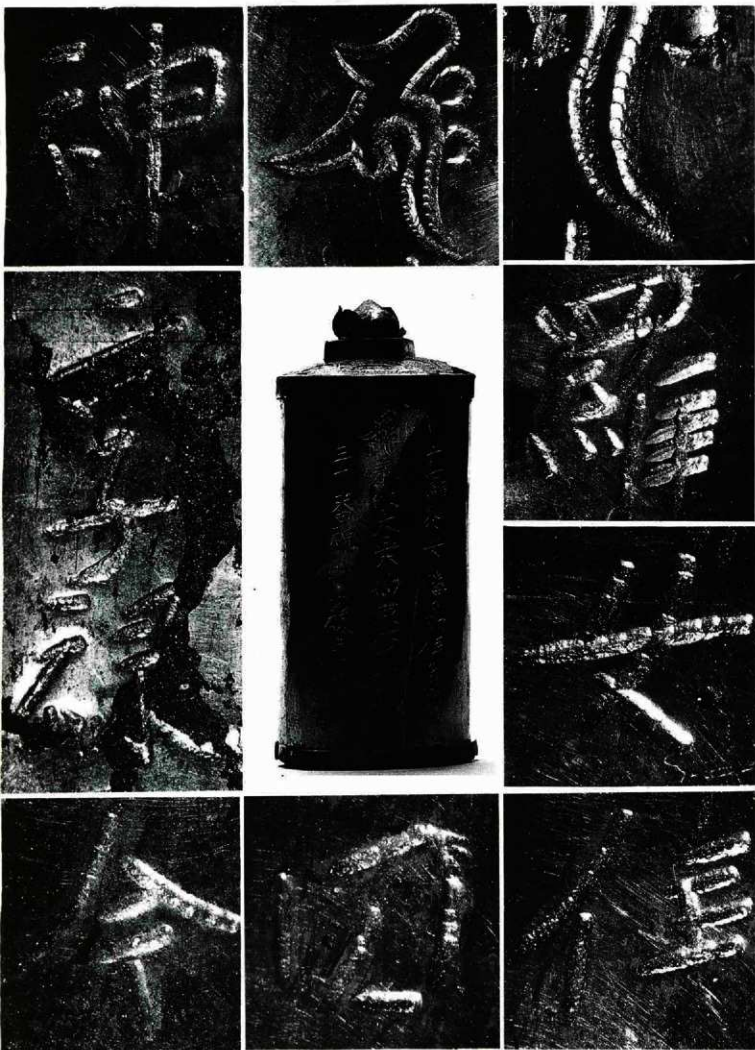




外容器と木製蓋、経筒の収納状態

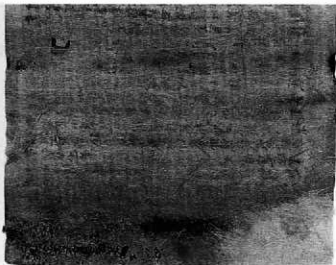


経筒（処理前）、経巻の収納状態、経筒のX線写真

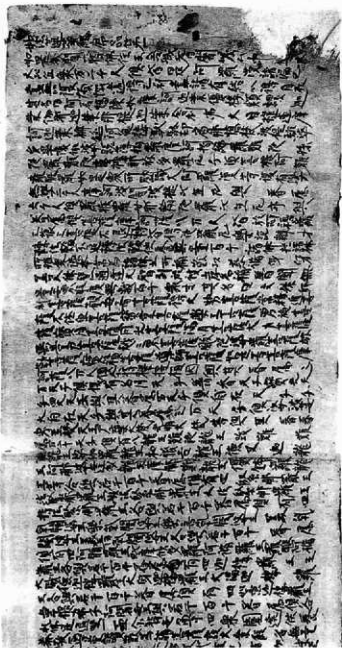


経筒銘文拡大写真（倍率；任意）

## 第一卷外題



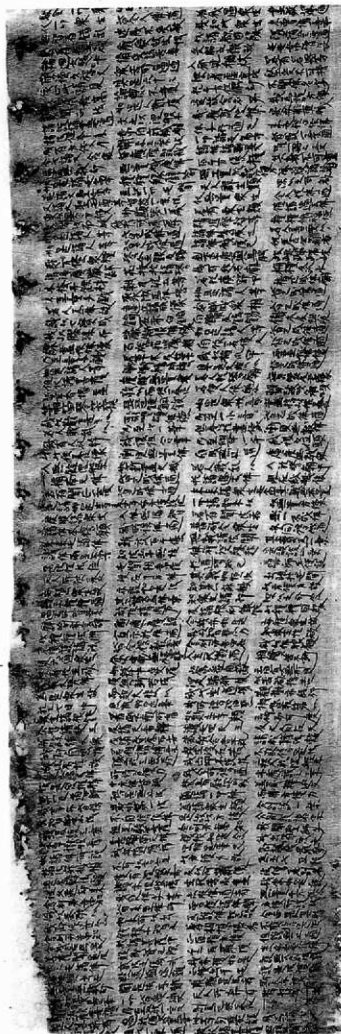
## 第一卷卷首



Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The characters are dense and arranged in approximately 25 columns from right to left. The text appears to be a form of classical Chinese or Japanese writing, possibly a legal or administrative document.

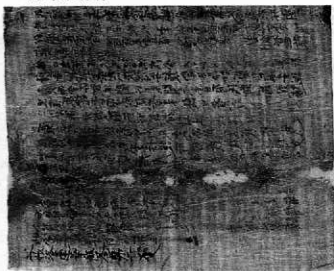
Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The characters are dense and arranged in approximately 25 columns from right to left. The text appears to be a form of classical Chinese or Japanese writing, possibly a legal or administrative document.



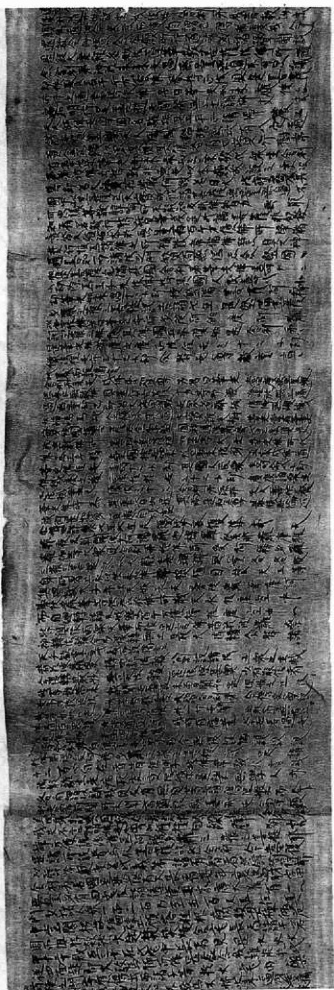
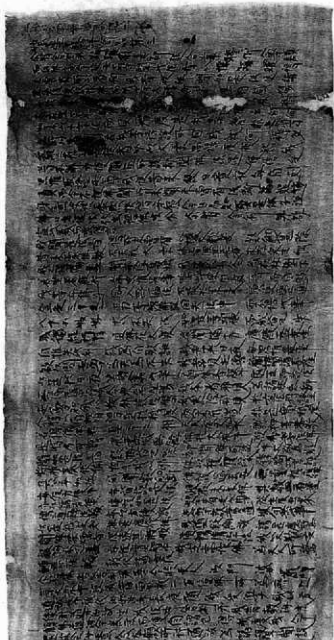


第一卷卷末

## 第二卷外題



## 第二卷卷首









Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some ink bleed-through from the reverse side.

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some ink bleed-through from the reverse side.

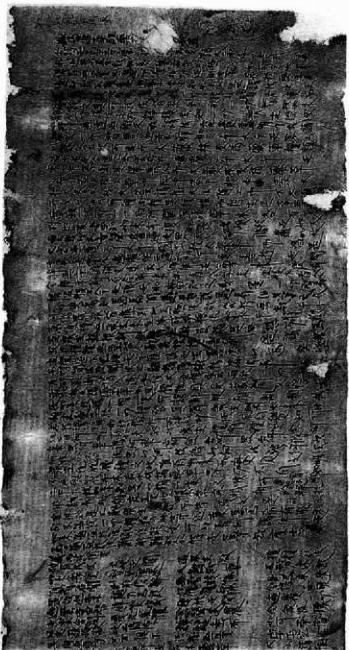


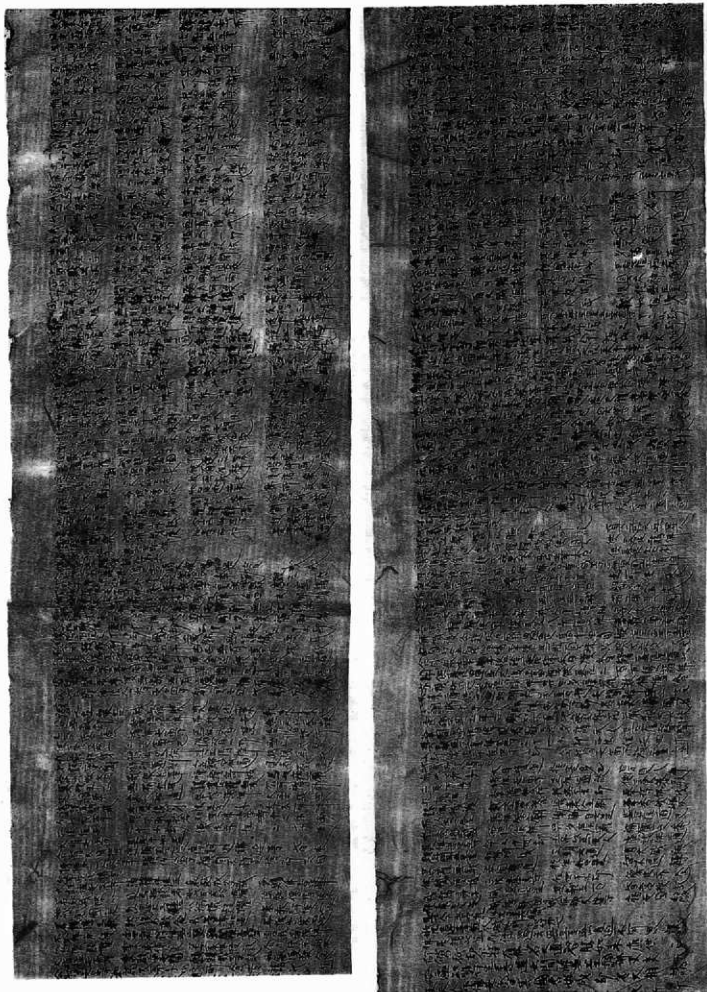
第二卷卷末

第三卷外題



第三卷卷首

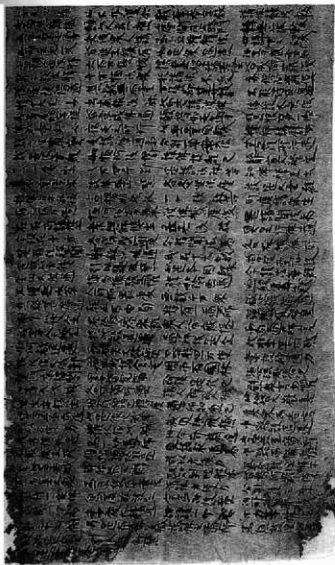






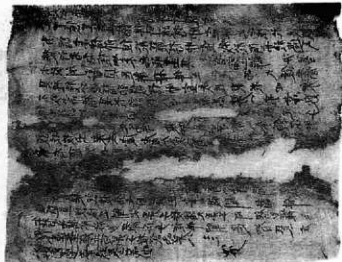
Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page is dark and shows signs of wear and discoloration.

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page is dark and shows signs of wear and discoloration.



第三卷卷末

## 第四卷外題



## 第四卷卷首





經卷第四 法華經第四卷  
 此卷之經文，係由佛之口宣，而由阿闍梨等所記。其文辭之深奧，非筆墨所能盡述。然其義理之宏深，實為世間所罕見。經中所述，皆為成佛之妙法，及一切眾生之利益。其言辭之莊嚴，其音韻之和諧，實為佛經中之瑰寶。此卷之經文，不僅為佛教徒所尊崇，亦為世間人士所共賞。其義理之宏深，實為世間所罕見。經中所述，皆為成佛之妙法，及一切眾生之利益。其言辭之莊嚴，其音韻之和諧，實為佛經中之瑰寶。

此卷之經文，係由佛之口宣，而由阿闍梨等所記。其文辭之深奧，非筆墨所能盡述。然其義理之宏深，實為世間所罕見。經中所述，皆為成佛之妙法，及一切眾生之利益。其言辭之莊嚴，其音韻之和諧，實為佛經中之瑰寶。此卷之經文，不僅為佛教徒所尊崇，亦為世間人士所共賞。其義理之宏深，實為世間所罕見。經中所述，皆為成佛之妙法，及一切眾生之利益。其言辭之莊嚴，其音韻之和諧，實為佛經中之瑰寶。





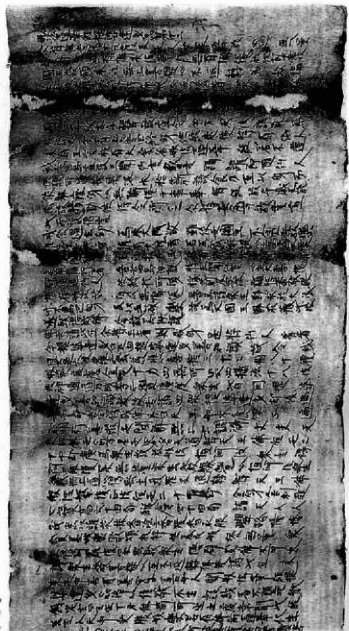


第四卷卷末

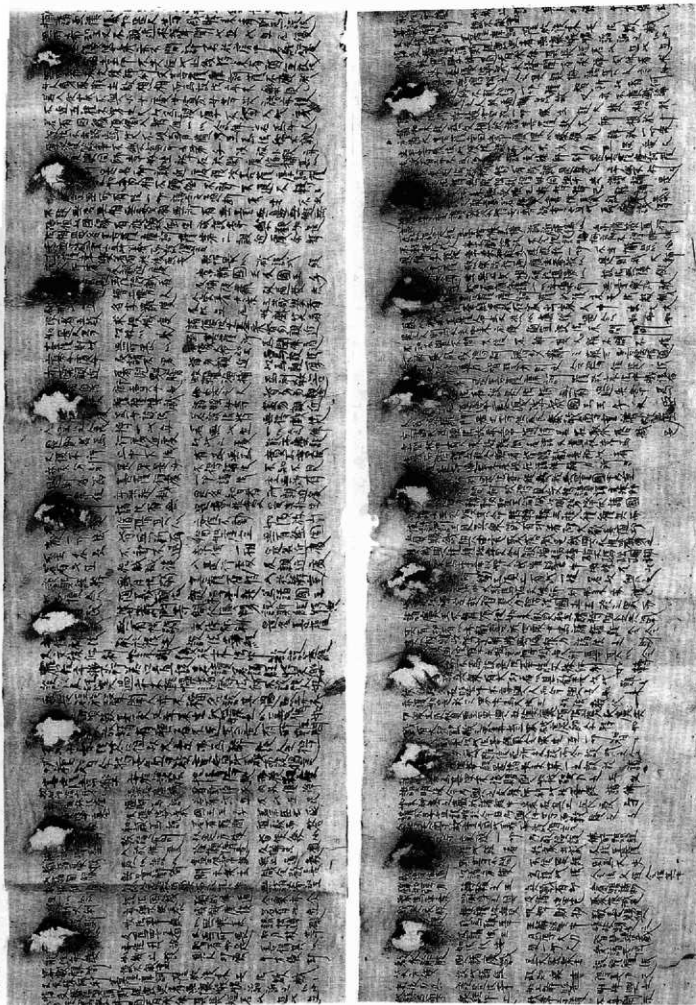
第五卷外題



第五卷卷首

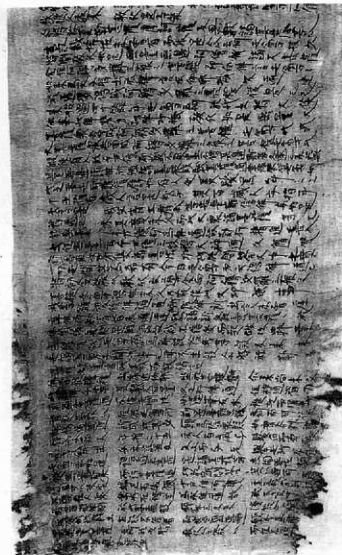






Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a traditional East Asian script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some dark spots and irregularities in the ink.

Handwritten text in vertical columns, continuing the manuscript. The text is dense and appears to be in a traditional East Asian script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some dark spots and irregularities in the ink.

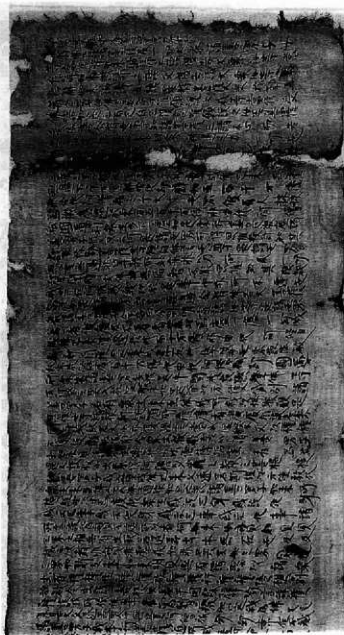


第五卷末

第六卷外題



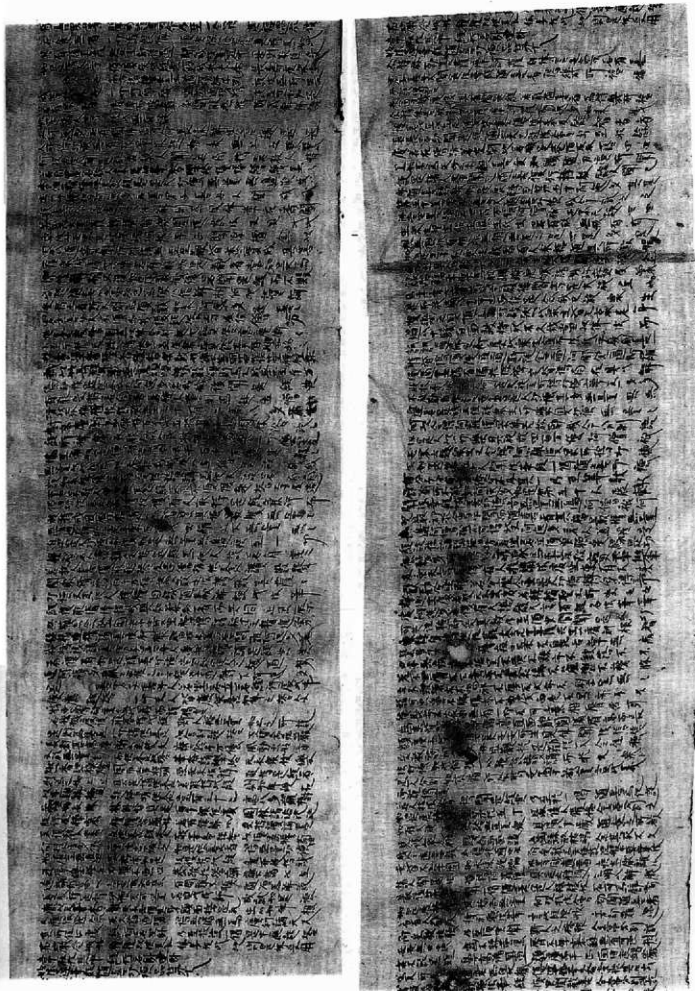
第六卷首





Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some fading and discoloration.

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some fading and discoloration.



Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of wear and discoloration.

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of wear and discoloration.

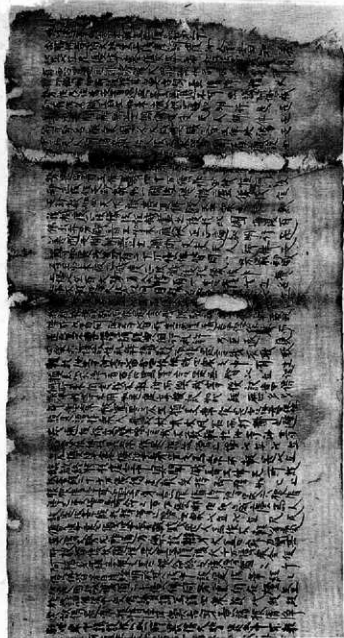


第六卷末

第七卷外題



第七卷首



此の書は、法華經の第七卷である。この巻には、  
 妙法蓮華經の第七の章、即ち「持明咒品」の  
 内容が記されている。この品は、法華經の  
 重要な部分であり、持明咒の秘密を授け、  
 修行の道を示す。この巻の文字は、  
 非常に密で、筆致も独特である。

此の書は、法華經の第七卷である。この巻には、  
 妙法蓮華經の第七の章、即ち「持明咒品」の  
 内容が記されている。この品は、法華經の  
 重要な部分であり、持明咒の秘密を授け、  
 修行の道を示す。この巻の文字は、  
 非常に密で、筆致も独特である。



Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a traditional East Asian script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of wear, including several dark spots and a small tear near the top center.

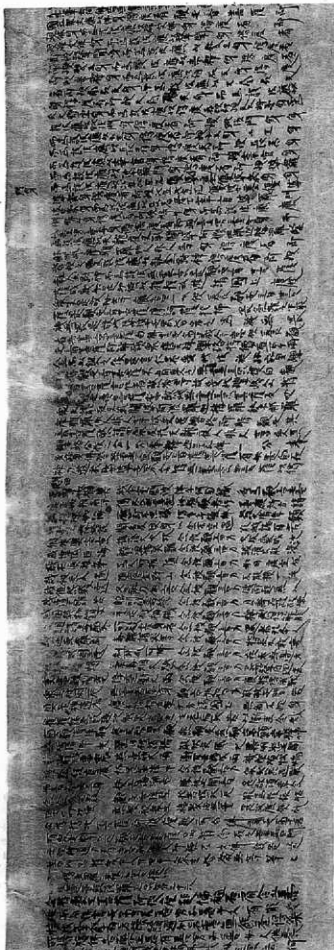
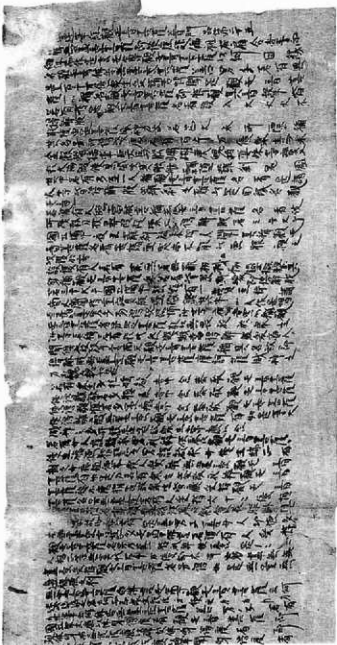
Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a traditional East Asian script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of wear, including several dark spots and a small tear near the top center.

第七卷卷末

## 第八卷外題



## 第八卷卷首

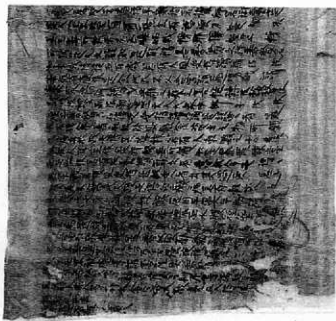




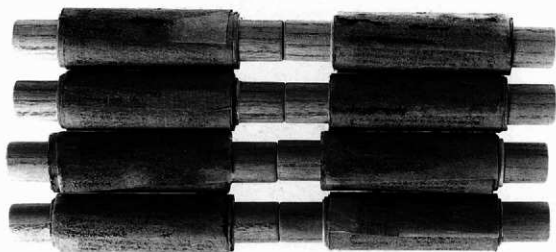
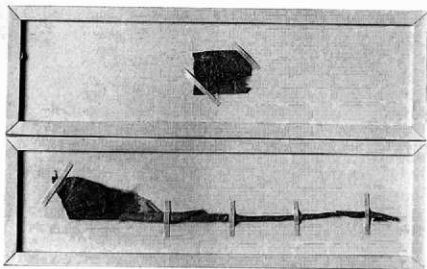
Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some fading and discoloration.

Handwritten text in vertical columns, likely a manuscript page. The text is dense and appears to be in a historical script, possibly Chinese or Japanese. The page shows signs of age and wear, with some fading and discoloration.





第八卷巻末



経巻02 法華経第八巻、経軸（こより）、残欠、経巻の修復保存状態

第一卷



第二卷



第三卷



第四卷



第五卷



第六卷

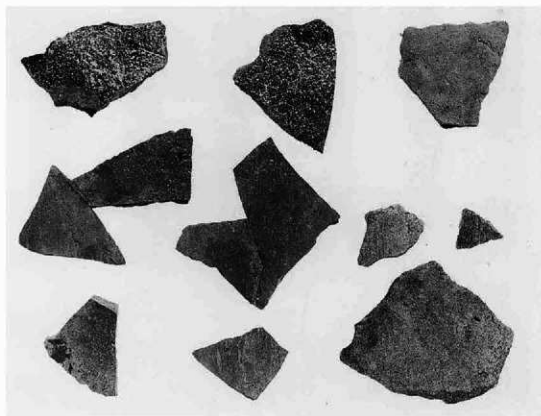
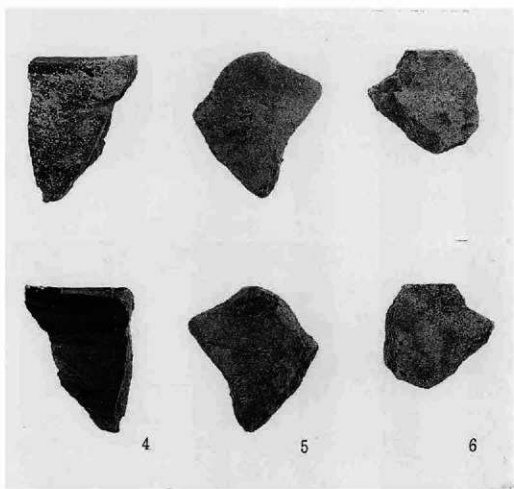


第七卷

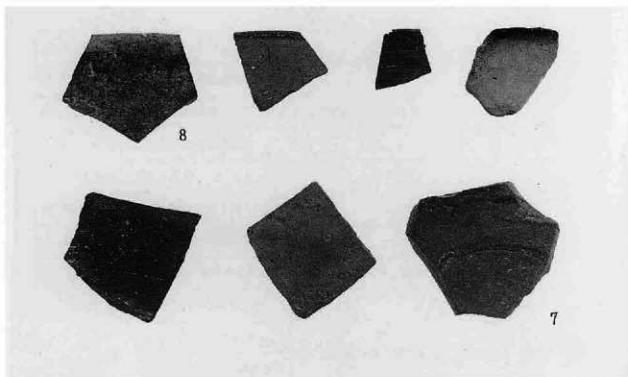


第八卷





土製容器片



№3地点出土の土器



№3地点出土の鉄器

# 報告書抄録

ふりがな	かつおきょうづか									
書名	勝雄経塚発掘調査報告書									
副書名	山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告XXV									
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告									
シリーズ番号	第158冊									
編著者名	山下史朗・松岡千寿・大川昭典									
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所									
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  ☎078-531-7011									
発行年月日	1997(平成9年)年 3月 31日									
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	調査番号							
勝雄経塚	兵神北淡勝字	庫戸河奥	県市区町雄谷	28109	第1次 確認調査 940310	34度 47分 02秒	135度 05分 00秒	1995.2.13 ? 1996.3.8	411㎡	山陽自動車道 (三木ジャンクション)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
勝雄経塚	室経町塚	室町時代 享禄三年 (1530)	経塚		銅製経筒 紙本経8巻		室町時代の廻国納経の経塚で、銅製経筒の中に法華経全8巻がほぼ完存していた。			

---

兵庫県文化財調査報告 第158冊

## 勝雄経塚

- 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXV -

1997年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 株式会社 精文舎

〒652-0047 神戸市兵庫区下沢通6丁目2番18号

---